

# HIMALAYA

# ヒマラヤ

# No. 336



**1999 NOVEMBER**



**日本ヒマラヤ協会**  
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

# 2000年H A J サマー・キャンプ隊員募集

## カラコルム スパンティーク (7,027m)

スパンティークは、チョゴルンマ氷河の源頭に位置する名峰である。南には、マルビティンやハラモシュ、北にグレート・カラコルムの山々を望むことが出来る。カラコルムの展望台でもある。

H A Jでは、サマー・キャンプの新舞台としてパキスタンを選んだ。その第一歩としてスパンティークにて開催する。

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題があるが、情報の収集や強力なスタッフの配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたい。

尚、パキスタン登山の申請は、年内に行わなければならないので、希望者は早目の申込みに協力をお願いしたい。

記

1. 期間：2000年7月14日(金)～8月28日(日)
2. 募集人員：10名程度

3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：10月31日(定員になり次第〆切)
6. その他：H A Jの登山隊は、「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿に参加の義務があります。



▲左の稜が南東稜

### 表紙写真

ハナス氷河の標高2,600m付近に、左手からかなりの水量の滝が落ちている。すぐ上に氷河があるものと思っていたら、延々と川原が続いた。

氷河の舌端付近まで登ると、右手に友誼峰から奎屯山に続く稜線が現れた。写真はC 1 付近から見た友誼峰である。(撮影：天城敏彦)

## ヒマラヤ No.336

### 1. H A J サマーキャンプ 友誼峰を中国側から探る

酒井 國光

### 12. H A J 華甲望年会開催について

山森 欣一

### 13. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・Books・インフォメーション〉

### 15. 竜王ー中国領カラコルムへの挑戦(2) ハッグ・マクマナース

### 19. 新疆ウイグル自治区登山の和文参考資料

### 24. 寸感・事務局日誌

## アルタイ山脈 友誼峰を中国側から探る



▲C 1から見たハナス氷河左岸の山々。右の3,998 m峰から稜線まで雪に覆われた山が続く。

### はじめに

アルタイ山脈の友誼峰（4,374m）へ中国側から登りに行ってきました。結論を先に言いますと、日本を出て帰るまで29日間の隊だったのですが、頂上には手が届きませんでした。登山期間はたったの7日間でした。アルタイは遠いですね。

そもそもの計画の発端を『ヒマラヤ333号』の登山計画から引用しておきましょう。

「本会は、1983年に初めて中華人民共和国に代表団を派遣し、今後中国で展開する登山、踏査等の計画について協議を行いました。その計画の一つとして申請されたのが、今回の目標である友誼峰であります。申請以来16年目にしようやく実現する登山であります。

友誼峰は、中国、モンゴル、ロシアの国境付近に聳えています。このため、モンゴル側からは、日本隊も何隊も登頂しておりますが、南の中国側からは、全く初めてトライされる山であります。このためベース・キャンプまでのアプローチ・マー

チに何日かかるのか現在でもはっきりしません。まさに未知の領域の登山と言えます。」

こんな訳で、手探りの状態で準備を進めていったのですが、中村保氏に旧ソ連邦が作ったこの周辺の10万分の1の地図を送っていただいたのは、大きな力となりました。ここでお礼申し上げる次第です。

出発間際の7月12日になって、新疆登山協会から入ったファックスには驚かされました。曰く、

1. キャラバンの所要日数は、片道だけでも5日間は必要です。（片道3日と考えても登山期間は13日しかなかった）
2. 森林と泥沼地帯での行動であるため、蚊とか蛇とかが多いし、たまには熊、毒蛇、希有動物がいるので、それを防ぐ薬をご用意ください。
3. 現地の費用徴収状況として、べらぼうな額を言ってきた。

私たちが準備できたのは防虫ネットだけで、ライフル銃と血清は中国側に依頼しました。

## 隊の概要

### 1. 目標の山

中華人民共和国、新疆ウイグル自治区  
布爾津県  
友誼峰 (ユウイ・フェン Youyi 4,374m)

### 2. 登山期間

1999年7月24日～8月21日

### 3. 登山の目的

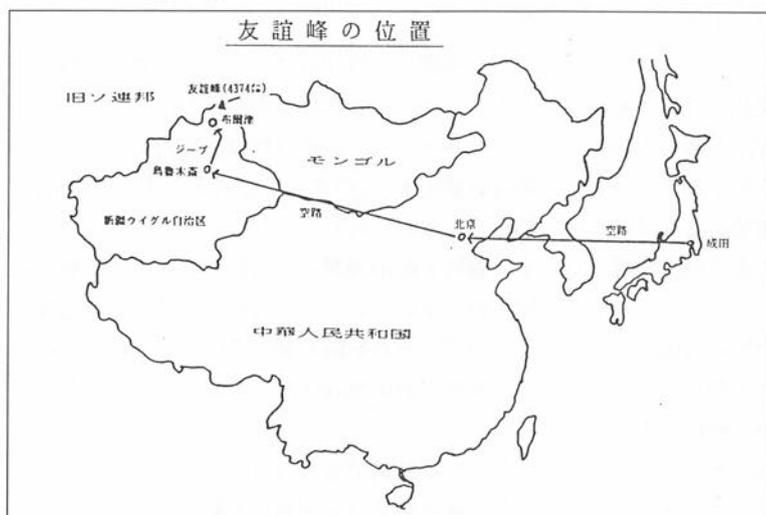
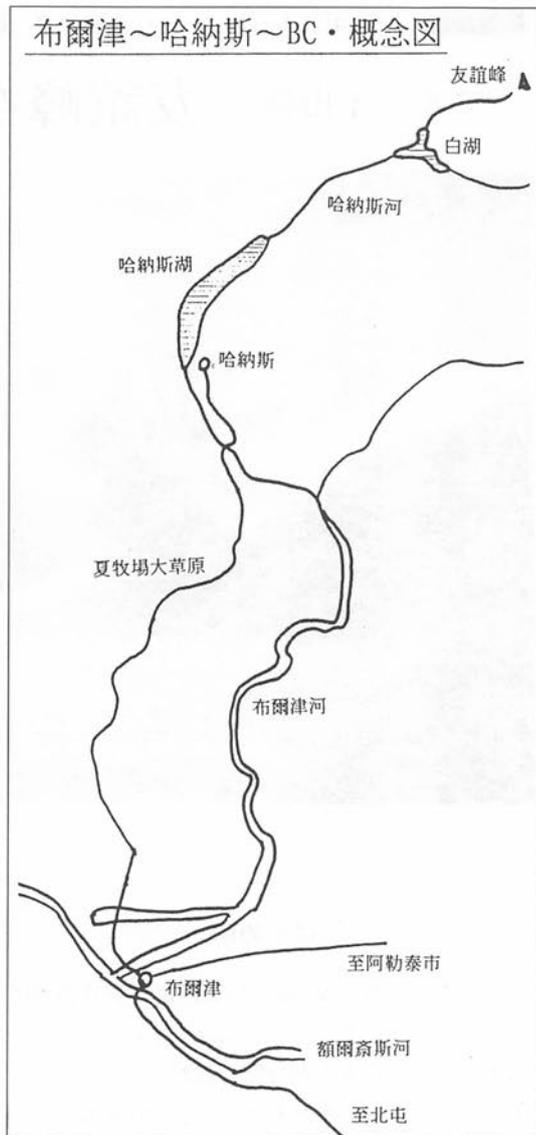
- 1) 友誼峰の南面からの初登攀
- 2) 山岳自然環境の保全  
(テイクイン・テイクアウトの実践)

### 4. 結果

- 1) 8月10日、6名で4,000mまで登ったものの、悪天候で敗退する。
- 2) 持ち込んだ物のほとんどを回収し町まで下ろして処分した。

### 5. 隊の構成

隊長	酒井 國光 (60歳)	茨城
隊員	西嶋鍊太郎 (56歳)	石川
〃	佐藤 邦彦 (56歳)	福島
〃	天城 敏彦 (52歳)	東京
〃	森山 安次 (49歳)	東京
〃	久保 均 (45歳)	青森
〃	久保 隆洋 (14歳)	青森
連絡官	李 春元 (35歳)	
通訳	周 建軍 (31歳)	
馬方	任 玉漬 (50歳)	
	他3名	



▲峠の高山植物

# 友誼峰周辺概念図



## 行 動 記 録

(初めての山域なので写真を多くし、文章はなるべく少なくした)

### ハナスまで

7月24日(土) 晴れ

成田出発。北京前門飯店泊。

7月25日(日) 晴れ

空路烏魯木斎(ウルムチ)へ。友好大酒店泊。

7月26日(月) 曇り

2台のジープで布爾津(ブルチン)へ。途中車両故障もあり、ブルチンまで11時間半もかかってしまった。

7月27日(火) 晴れ

食糧等を購入し、午後哈納斯(ハナス、ただし現地での表記は全てカナス)へ。またしても車両故障のため到着が遅くなってしまい、パオ泊。



▲「夏牧場大草原」を走る



▲ハナス湖北岸、湖岸の流木は「浮木長堤」



▲防虫ネットは必需品だった

### BCまで8日間

7月28日(水) 晴れ後曇り

朝食前、ハナス湖を渡る。船で約2時間かかり、11時北岸へあがる。馬を待つこと3時間半。さらに荷物を積むのを待たため、歩きだしが7時過ぎになってしまった。約2時間歩き牧場に泊まる。

夜中、公安(日本の警察)が来て、「この隊は森林地帯の入域許可を取っていないから、これ以降の行動はできない」とか何とか言ったのだろうか、連絡官はハナスへ戻されてしまった。我々は「許可が来るまで動くな、写真を撮るな」との監視付きの身となってしまった。結果的にこの2日間のロスが大きかった。

7月29日(木) 晴れ

暑いテントの中でゴロゴロ。

7月30日(金) 曇り後晴れ

またしてもゴロゴロ。これから先はアルタイ・



▲白湖の泊まり場(白濁の水を使用する)

▼中国側スタッフ(左より李、任、周、任の息子)



ハナス自然景観保護区と言い、国家レベルの1級保護区だとか。

7月31日(土)曇り

今日も停滞かと諦めていたら、9時半頃連絡官が帰って来て、出発だと言う。

12時、荷物は馬方に任せて出発。森林、草原を交互に進む。時々川のそばに出るが、その水流の豪快なこと。思わず口をついた一句

「雪溶けを集めて速しハナス河」おそまつ。

17時、草原のカルカ泊(第2泊場)。夜降雨。

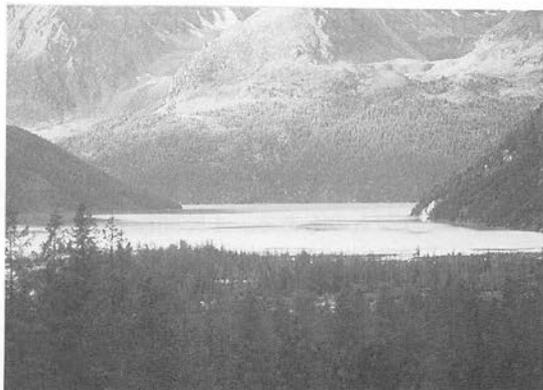
8月1日(日)曇り後雨

緑色の湯気を立てているような糞が目につく。熊の糞だと言う。「そう言えば、三角形の頭をした蛇を見た、あれは毒蛇だろう」などと言う会話が飛び交う。8時間ほど歩き、白湖到着。(第3泊場)。夜中雨強く降る。

8月2日(月)曇り後雨

昨日仕掛けたさし網に20cm前後の魚が11匹かかった。ウグイに似ていて、匂いはワカサギ、腹の中

▼上流からの白湖(右の山裾が通れず峠越え)



からバツタが出てくる。

峠越えは滑るので岩が乾くまで待たなければならない。午後テントを撤収し、いざ出発と言う時降雨。再びテントを張る。結果的に停滞である。

8月3日(火)晴れ後曇り

峠越えのため、隊員も馬を1頭ずつ引いてほしいとの事。しかし、馬と人間の歩く速さが違うため苦勞する。途中馬が転落し荷物が散乱するというハプニング有り。このハプニングが隊に与えた影響は大きい。

峠付近は高山植物が多い。ハナス河へ下り着く手前に小屋掛けあり。(第4泊場)

8月4日(水)曇り後雨

今日のハプニングは連絡官がライフル銃の弾倉を落としてしまったことだ。その後何回かベースから探しに行ったがみつからなかった。

ハナス河岸の草原、標高2,320mにBC設営。夕方盛大にBC開きをする予定が、降雨のためビールで乾杯をただけですぐにテントに入ってしまった



▲峠直下より北を望む(氷河の右下がBCの方角)



▲BCまじか(ハナス河の水量もへった)

た。入山に時間が掛かり過ぎ、登山期間が短くなった。13日には下山を開始しなければならない。

### 登山期間は7日間

8月5日(木) 雨降ったり止んだり

12時過ぎに、6人で偵察に出発する。所どころ踏み跡のようなものもある。1時間程で雨が強くなったので、岩小屋に入る。

1時間して小止みになったので、氷河の舌端まで行って荷物をデポして戻る。以後この場所がブーツの履き換え所となった。夕食は天城シェフの手巻き寿司、うまかった。

8月6日(金) 晴れ

すがすがしい晴天。ハナス氷河を詰め、2,900m付近まで偵察をする。中国の本で友誼峰と思っていた山が全く90度捻った違う山であることがわかった。また友誼峰へのルートは、最初予定していた西面の氷河から奎屯山とのコルへ出る方がよさそうだと判断した。

標高2,600mのモレーン上にデポテントを設営。

8月7日(土) 雪

酒井、西嶋の2名でC1地点を決めに行く。他は停滞とする。

氷河舌端に登る頃より吹雪が強くなったので、デポテントに入って天気待ちをする。

水流の左の大岩を縫って登り、上に出るとそこは広い草原であった。前方が白一色なのでここが氷河なのか不明だ。丸い転石を踏んで延々と進む。

氷河上もどこを登っているのか分からないままひたすら前進する。3時半後方の視界がきくと、左手にギザギザの国境稜線が見える。もう3,000



▲BC全景(この写真の撮影場所の左下が水場)

▼氷河舌端を望む(左奥の白い山が友誼峰)



mは越えたようだ。ここから東に向きを変え、ヒドンクレバスに気をつけながら登る。

4時半、荷物をデポして下る。4時間かけてBCへ帰り着いた。11時間の吹雪の中での強行偵察の一日、60歳のじいさんのやることではないな。終始トップで頑張った西嶋隊員にただ感謝。

8月8日(日) 晴れ

天城、佐藤、森山、久保の4名でC1への荷揚げをし、そのままC1に泊まる。

酒井、西嶋は停滞。午後、西嶋、久保隆洋は氷河上まで散歩に行く。

8月9日(月) 晴れ

天城、森山は4,000mのコルまでルート工作する。クレバスが多く、右へ左へと悪戦苦闘。さらには上部で「地雷原」と表現したヒドンクレバス帯に悩まされた。

佐藤、久保はデポテントを往復して荷揚げ。

酒井、西嶋はBCからC1へ入る。

8月10日(火) 曇り後雪

6人で頂上アタックに出発する。



▲8月10日、頂上アタックに出発

▼ヒドンクレバスが縦横に走る氷河を登る



昨日の偵察ルートに従い、クレバスを縫って進む。西の空には真っ黒い暗雲が漂い、荒天が近付いていることが明瞭だ。友誼峰頂上も雲の中だ。

コルに登る頃より風雪は一段と強くなる。12時前にコルに着いたが、余りにも風が強いため、ツェルトを被り天気待ちをする。これが実に4時間にもなってしまったのだ。

4時、回復の見込みがないため下山を決行する。登りのトレールは完全に消え、赤布を探しながら、迷い迷いの退却行となった。そんな時、私がヒドンクレバスを踏みぬいて墜落した。アンザイレンしていないため、5m位の深さだったので命拾いをした。最後は氷穴から這い出るトドのような恰好で、ザイルで引っ張り上げられたのだ。

6時間半かかってどうにかC1に帰着。その晩の風はすさまじかった。何度テントを飛ばされるかと思ったことか。

8月11日(水)曇り

昨日から続いた降雪で、ルートは一段と不明になってしまった。天気も昨日の朝のようだ。まだ1日あるが潔く敗退を決意する。

全ての荷物を持ち、下山する。BCでの楽しみは天城酒造特性の日本酒と羊の焼肉だ。

帰路は馬に乗って

8月12日(木)晴れたり曇ったり

1日余裕が出来たので下山準備に万全を期した。午後からは乗馬の練習もした。帰路は4日間馬に乗るつもりで、全ての馬を待機させておいたのだ。

8月13日(金)雨後曇り

馬上からの景色はすばらしい。たった50cm位の

▼正面左の露岩の右のコルが最高到達点



差なのに宇宙が変わったみたいだ。馬は四輪駆動だ。坂道だろうが、石のがたがた道だろうが、砂地だろうが、水流だろうが平気で走れる。

今日の私は始めの30分で落馬をした。それも教科書に書いてあるような典型的な落馬だった。

第4泊場泊まり。

8月14日(土)曇りのち雨

白湖南岸の山々は真っ白だ。もう今年の夏は終わったんだ。たぶん9日天城・森山がコルまでルート工作した時の好天が最後だったのだろう。

今日は峠への登りだけ馬に乗り、下りは余りにも急なため全員馬を引いて下ったのだ。

第3泊場泊まり。夜中雨強く降る。

8月15日(日)曇り

今日の楽しかったのは、草原をギャロップで走ったことだ。それにしても中学生の若者の馬術は好調だった。「おい、隆洋。もっと坂を下りきってからムチを入れてくれよ。こっちの馬まで坂の途中から走り出すじゃないか」第2泊場泊まり。



▲潔く撤退、クレバスは新雪で隠れてしまった

▼帰路は4日間馬に乗った



8月16日(月) 晴れ

早朝から馬方が馬を集めていると思ったら、熊が出たからとか。

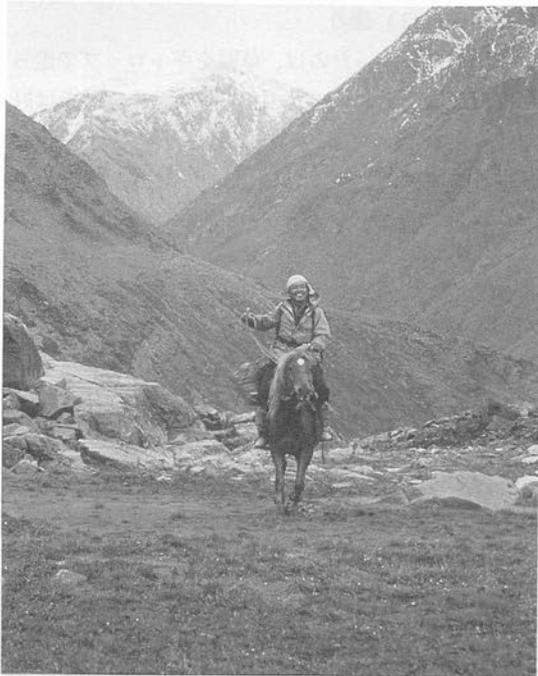
今日はハナスまで一気に下るのが、牧場の辺りで道を間違えかなりの時間をロスしてしまった。

5時半、ハナス湖北岸に帰着。観光客を乗せて来たモーターボートに頼んで船を呼んでもらうのだ。船が来たのが8時近くで、荷物を積んで我々が船に乗れたのが8時半になってしまった。

途中日が暮れ、鎌形の月が出て、ハナスに戻ったのが10時半であった。パオ泊まり。

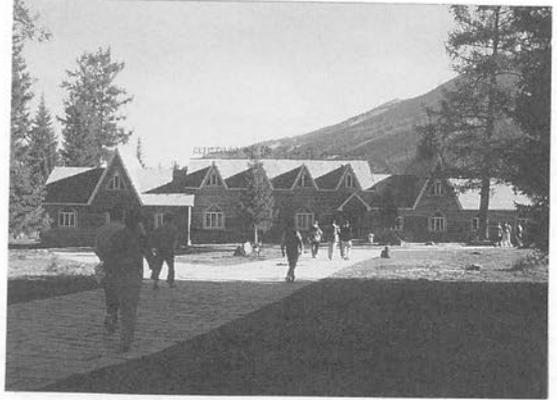
8月17日(火) 晴れ

機材整理。夕方サウナに入り、何日ぶりかでさっ



▲馬は草原を渡る風の生まれ変わりだ

▼ハナスは一大観光地化した(建物は食堂)



ぱりとする。夜は観光パオみたいな所でお別れパーティ。馬方もみんな来た。パイジュを茶碗に3分の1位入れて「飲み切り」と一気飲みさせられたのにはまいったな。

8月18日(水) 晴れ

5時間かけてプルチンに戻る。郵便局から日本へ電話を入れる。

8月19日(木) 晴れ

下界に来たらよく晴れる。11時間かけてジープでウルムチに戻ったが実に暑い。眠い。ひたすら耐えるだけだった。

8月20日(金) 曇り

午前中の便で北京へ。

8月21日(土) 晴れ

北京空港は大混雑。うまい具合にエコノミーの席を貰ったのでゆったりと飛行機の旅を楽しむことができた。

おわりに

以上のようなことで今年のサマーキャンプは終わりました。結果的に頂上に立てなかったのは残念です。種々な面から考察を加え、報告書の形で出したいと準備をしています。

「はじめに」でも書きましたように、今回の登山は、外国人として全くの未知の領域でのものですから、周辺の山々の姿は本邦初公開のものでしょう。以下にスペースの許す限りの写真を載せ、今回の報告といたします。

(記：酒井國光)



◀ハナス湖は広大な氷河湖である。長くて湾曲しているため、曲がった部分が山に遮られているが、長さは25kmもあり、幅は1.6ないし3.9kmである。水平面は海拔1,370mで、最も深い所は188.5m、中国で最も深い淡水湖であると言われている。

10数年前、開高健が謎の巨大魚を求めた頃は秘境だったが、今は観光用のモーターボートがひっきりなしに水しぶきを上げている。

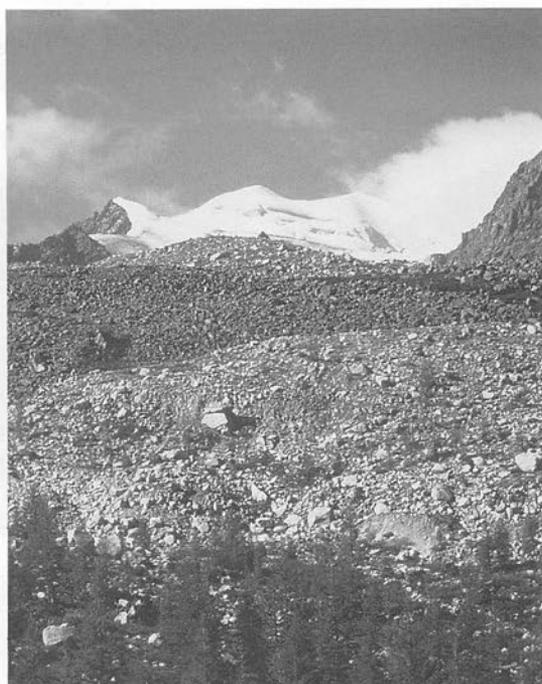
▶ハナス湖を出て、5日目に白湖に着いた。名の通り白濁の湖であるが、天気により刻々とその様相を変え幻想的である。周囲は薬草の宝庫だそうで、北の旧ソ連邦から峠越えて薬草取りが入り込んでいるとか。



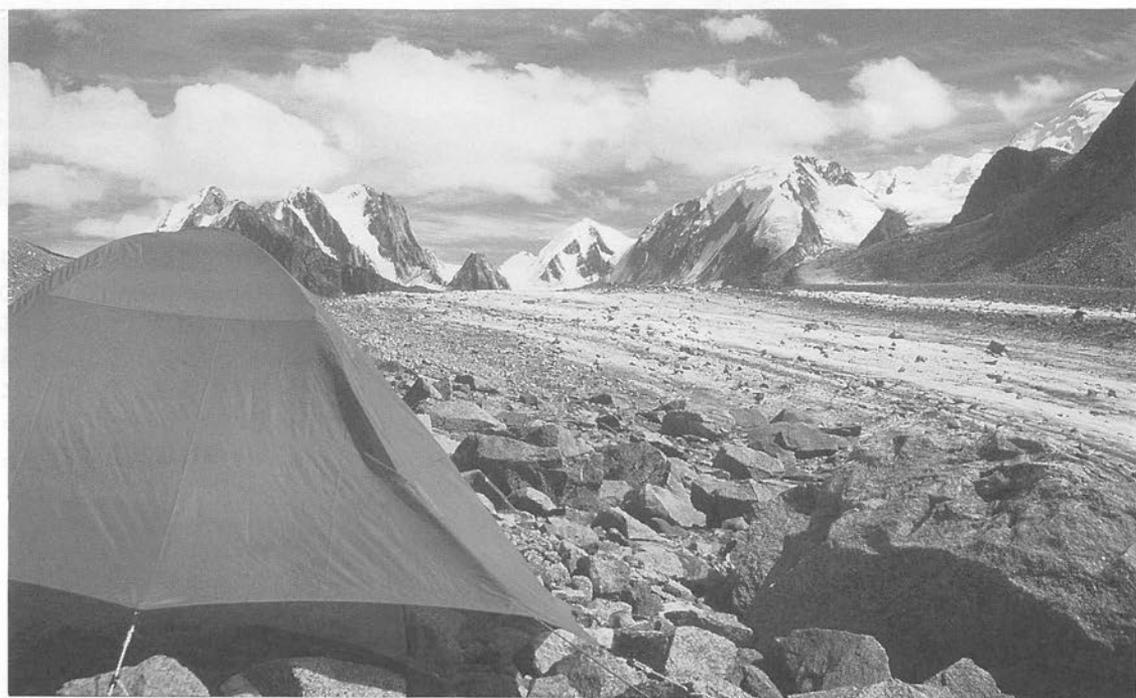
◀峠（標高約2,800m）越えの途中から白湖南岸の山々（標高3,400～3,700m）。懸垂氷河が崩れ落ちている音が雷のように響いている。帰路にはすっかり雪化粧してしまった。



▲峠より南西方面の国境の山（標高3,480m）。前掲の友誼峰周辺概念図にはこの山は出ていない。

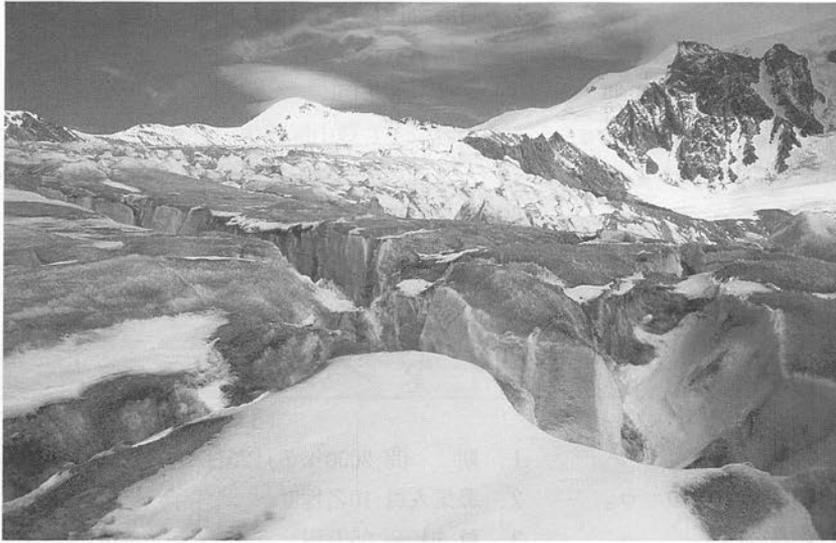


▲BCから30分程登った所に良い水場があり、山の行き帰りご厄介になった。その水場の対岸にある3,550m峰。いつも「あれは登れるね」と話すが、「下の激流をどうやって渡るのよ」が結論。氷河まで行って、対岸を戻ってくるしかない。



▲氷河舌端には左端から登り、モレーン上（標高約2,600m）にデポ用のテントを張った。正面の山々が中国の地図では友誼峰として紹介されているが、実際は90度左に捻った所の山だ。

▶真南よりの友誼峰。氷河上の同じ地点に立って見ると、前の写真の山々の方がずっと絵になる。実際に見比べると、絵になる方を友誼峰と紹介した気持ちが良い分かる。



◀西面の氷河はクレバスが縦横無尽に走り、まさにズタズタである。夏期、新雪が無い時は歩き易いが、ヒドンクレバスになると正に「地雷原」である。正面左の白い山が三国境の中国名崑崙山。モンゴル側でマルティンと言うのはこの山か、もっと東の4,025m峰を言うのかは不明である。

▶C1（標高約3,250m）より見た北西の国境線上の山。なかなか立派だ。中国製の地図にはこの山らしい山が載っているが、旧ソ連製の地図にはこの山らしきものは無い。ともに標高は記載されていない。



## HAJ華甲望年会開催について

理事長 山森 欣一

本会も創立30年を過ぎました。当面の問題には、会員増による財政の正常化、世代交代などがありますが、21世紀を望見すると、登山を取り巻く状況の変化（高所登山の遠足化など）による登山文化の継承も気になるところであります。それにも増して重要なことは、登山の実践であります。実践なくしては、情報の伝達も事故防止や環境保護の啓蒙もできません。その意味では、この数年来毎年2～3隊の登山隊を派遣し、それを受けて、インド・ヒマラヤ会議、中国登山研究会、高所登山事故と環境対策研修会が開催され、情報の伝達と啓蒙活動を行うことができていることは、会員の皆様の支援の賜物であります。

30年の歴史を重ねる内に、役員、会員にもそれぞれ相当の年輪を重ね、所謂、還暦等人生の節目を迎える方が続出する事態となっています。この傾向は今後増えることはあっても減ることの無い必然であります。

HAJでは、毎夏のサマーキャンプ登山隊を中心として、7月に合同壮行会を開催し、会の内外

から参加載いて計画の発表を行い、あわせて交流の場を提供しています。しかし、報告の場を設けるのはなかなか難しくHAJ東京集会で細々と行っているのが現状であります。

そこで、本年から会の内外の参加を得て、その年に派遣した登山報告を行い、席上その年の還暦を迎えた方のお祝いを行う場を設けることとなりました。今後毎年12月第二土曜日にこの会を定着させます。

本年は下記のとおり予定していますので、役員等のご協力を宜しくお願い申し上げます。

1. 名称 HAJ華甲望年会
2. 日時：12月11日（土）18時～20時
3. 場所：東京 未定
4. 会費：8千円
5. 内容 1）登山隊報告 チョム・カンリ／アルタイ／チベット連続 2）還暦者のお祝い
6. 当日お祝いする還暦者の該当者について  
\*1999年中に満60歳となる方でHAJ会員  
\*本人の申告、又は、会員の推挙

## 2000年HAJサマー・キャンプ隊員募集

### 玉珠峰（6,179m）

青海省の省都である西寧から西へ約1,000キロ。山中には1週間滞在の予定です。

記

1. 期間：2000年7月23日～8月12日(21日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：65万円
4. 切り：定員になり次第
5. 資料請求先：HAJ事務局

### チョム・カンリ（7,048m）

ラサから西北西約106kmの所にあるのが、チョム・カンリです。1996年秋中国・韓国合同隊によって初登頂され、97年春に日本隊が登頂しています。ルートは既登の南面を予定していますが、隊員の協議によって変更される場合があります。

記

1. 期間：2000年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円

### ニンチン・カンサ（7,206m）

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。日本隊は既に3隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間を予定しています。

HAJの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1. 期間：2000年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円

## 地域ニュース

### 《パキスタン》

#### スパンティーク (7,027m) の登頂に成功

バーバリアンクラブが派遣した登山隊（野沢歩隊長(35)ら6人）は、南東稜から8月15日に隊長と今村裕隆(40)、福永泰三(29)両隊員が登頂。17日にも岩崎洋(39)、古谷朋之(26)両隊員も登頂した。

#### ゴズサール(6,677m)に初登頂

仙台一高山の会が派遣した登山隊（山形一朗隊長ら8人）は、8月17日午後4時20分初登頂に成功した。詳細は不明。（1999.8.27 スポニチ）

#### サカルサール(6,272m)に初登頂

横須賀山岳会が派遣した登山隊（宮沢章(60)隊長ら5名）は、8月13日12時30分初登頂に成功した。登頂したのは隊長と亀井貫司(69)、鈴木輝明(49)、石川誠(56)の各隊員。

#### キンヤン・キッシュ(7,852m)断念

同人パハールが派遣した登山隊（飛田和夫(53)隊長ら3人）は、北峰約6,500m地点に達したものの悪天候などのため登頂を断念した。

### 《ネパール》

#### ブリクティール・サイル(6,364m)に登頂

新ネパールと中国国境に聳える同峰を目指していた登山隊(石井清(48)隊長ら5名)は、8月3日日本側4名とネパール側4名が登頂に成功した。同隊は7月27日4,700m地点にBCを設営。5,340mと5,800mに上部キャンプを出して登頂したものの

### 《中国》

#### ガッシャーブルムⅡを断念

立教大学が派遣した登山隊(鯉坂青青隊長(65)

ら13名)は、C4(6,750m)を建設したが、雪崩などのため登頂を断念した。

#### 無名峰(6,214m)に初登頂

日本教員登山隊（坂原忠清隊長(54)ら4名）は8月1日チベット自治区の無名峰に初登頂した。同峰は地元でカンディスミと呼ばれている。登頂したのは隊長と丹下、設楽両隊員とニマ。同隊は3日にもナイジェカンリ(6,106m)に隊長、村上、設楽、丹下の4名が登頂した。

#### チュング・ローズ(約5,980m)初登頂

中老年未踏峰登山隊（伊東亨隊長(69)ら9名）8月25、26の両日にチベット自治区の同峰に初登頂。メンバーの中には宮本数男さん(70)も含まれている。（9.1 朝日新聞より）

### 《キルギスタン》

#### 田部井さんがポベータに登頂

ポベータ(7,439m)の登頂を目指していた田部井淳子さん(59)は、8月11日午後4時10分登頂に成功した。同行していた渡邊玉枝さん(58)と真嶋花子さん(50)も登頂した。

田部井さんはこの登頂で旧ソ連邦にある天山とパミールの七千メートル峰5座登頂者となった。なお、これまでに日本人の5座登頂は、1991年の近藤和美、1994年林雅樹、1995年品川幸彦氏が達成している。

#### キルギスタンで日本人4名拉致

8月23日未明、キルギス共和国南部、バトケン地区で日本人4名を含む7名が、隣接するタジキスタン共和国から侵入してきたイスラム武装勢力に拉致された。その後、武装勢力側から人質解放の条件などが提示されたようだが、事態はあまり進展せず、長期化の様相だ。

6月のカシミールをめぐるインド・パキスタンの紛争でも同じだったように、イスラム武装勢力が今回も問題をしかけた側だ。アフガニスタンのたどった道をみればわかるとおり、これは単純な

テロ行為とは異なる。したがってキルギス政府は周辺のタジク、ウズベク、カザフなどの国々と共同で事に当たっている。既にタジキスタンのイスマイル・ソモニ（旧コミュニズム 7,495m）、コルジェネフスカヤ（7,105m）の登山ができなくなって久しい。事態のこれ以上の拡大をなんとか防いでもらいたい。また、こうした地域、インド、パキスタンから中国、新疆・ウイグル自治区に至る中央アジアで登山する側も、こうした現地の文化や問題を理解した上で出かけてほしい。（中川）

## 《インド》

ガンゴトリ山群のサトバント（7,075m）の許可をえて現地におもむいた労山高所登山学校隊（宮崎 孝隊長以下10名）は、氷河の衰退で北稜への雪壁に取り付けず、目標をバギラティⅡ峰（6,512m）に変更、8月16日に登頂に成功した。詳細不明。

## BOOKS

### 「ネパール登山の手引き」第二版

日本ヒマラヤ協会刊

一昨年発行されて、好評で版切れとなっていた「ネパール登山の手引き」に最新の情報を新たに加た、改定第二版ができました。価格2千円（送料310円）です。購入希望の方は事務局までご連絡下さい。 B 5版 162ページ

### 「神々の座」

8,000m峰のデータ

日本ヒマラヤ協会刊

「山、高さがゆえに尊からず。」というが、ヒマラヤの困難性がその絶対高度による以上、エベレストを頂点とする8千m峰の価値はゆるぎがない。

この冊子は、神々の座と呼ばれる高所での活動の歴史が、山別、性別の各種のデータで紹介されている。日本人8千m峰登頂者リスト等がまとめられていて、日本人のジャイアンツへの挑戦の記録がこの一冊で知る事ができる、大変な労作である。限定100部。事務局まで。

A 4版 154ページ価格3千円（送料310円）

## インフォメーション

### 第二回関東ヒマラヤ研究会

表記の研究会が栃木県今市市で開催される。

日時：11月13日（土）～14日（日）

場所：「しんこう苑」

〒321-2345 今市市和田島2112-2

TEL 0288-26-0817

交通：JR日光線下野大沢駅から徒歩20分

東武日光線下今市駅から車で15分

参加費：8千円（宿泊・資料・懇親会含む）

※1日だけの参加も可能。

申込み方法：申込み用紙に記入の上、郵送もしくはFAXで下記事務局まで。参加費は別紙振替用紙で振り込んでください。

申込み・問合せ先：関東ヒマラヤ研究会事務局

〒311-4613 茨城県東茨城郡御前山村長倉

609 石澤 好文方

TEL・FAX 0295-55-2871

（電話による問合せは夜間のみ）

定員：50名 〆 切：11月1日

内容：1999年登山報告

ナンガ・パルバット（8,126m） 労山

中国・アルタイ山脈・友誼峰（4,274m）HAJ

インド・ストック・カンリ（6,153m）

グループ・ド・モネージュ

チベット・シシャパンマM（8,027m）

群馬県山岳連盟

講演：「高所順応トレーニングについて」

筑波大学名誉教授 浅野 勝己先生

### 東京集会のお知らせ

日時 10月25日（月）午後7時～

内容 チョム・カンリ隊登山報告

場所 HAJルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分）  
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分）

# 竜王 — 中国領カラコルムへの挑戦(2)

## ハッグ・マクマナーズ

### ■サルポ・ラッコ河を越えて

ジョンとニックはK 2のゴルジュの入口へと歩いて行き、最後の徒渉地点を見つけた。

ニックは灰色の水に胴までつかり水流にくるくるとまねながら辛うじて遠くの岩をひつつかんだ。ジョンは水流のど真中につかまってしまったが幸い体の向きが下流方向だったのでザックの重さが水圧に抵抗し、水流は彼の頭を越えていった。二人とも何とか向う岸にだどり着き、私とラドを渡渉させる為、ロープを岩にしっかり固定した。

私の番だった。水流に対し体を横向きに保っていたにもかかわらず水は胸のあたりまでであった。%ほど進んだ地点で突然流れは一段と勢いを増した。私は懸命にロープを引張りながら足場を確保した。しびれるような冷水でさらにもがいた後、ニックが私をつかみ岸に引き上げてくれた。ラドの徒渉ぶりも私と似たりよったりだった。

我々はK 2の北側BCに向けて最後の2キロを歩いた。そこは川岸の細やかな草地で、ぼろぼろの白いテントが小さい窪地の隠に張ってあった。ジン・ジュンと連絡官のテントだ。彼らは我々を出迎え、あとで夕食をご馳走すると申し出てくれた。

我々が腹ぺこなのを悟ると、彼らは簡単な食事をすぐ作ってくれた。ジャスミン茶、くん製の野菜——軍の食料を数週間食べ続けた後でさえまずいと思われる程の代物——、揚げパン（こちらはうまい）だ。ジン・ジュンは調理の一部をプリモスで行い、他は外で、炉の中にたき木をくべて行っていた。彼らは、キッチン兼ダイニング用のメステントの中におのおののテントを張っていた。

腹を空かせながら新鮮な夕食会を待っていた時中国軍のキャラバン（2日前のベルを鳴らしていた一隊）が到着した。我々のささやかなテント・サイトは最適地を吟味した上で決めた所だったので、ラクダ工達は我々の側で動きを止め、まるで我々が異星人であるかのようにしげしげと眺めて

移動をうながそうとしていた。キャンプファイヤーの中では鍋がぐつぐつしている際中だったしそんなわけで我々は動きようが無かった。

中国キャラバン隊の中には軍人の他に研究者もいるようだった。将校は木綿のNumber Twoドレスに身を固め、とがった帽子で完璧に仕上げている。

私は研究者のひとり——滑稽なまでにきちんとしたジャケットとタイ、それにプレスの効いたズボンと白い日除け帽を身に着けていた——に、何の調査をしているのか尋ねた。彼は気取りながら、地理学、植物学、気象学、地質学、地震学等の実地踏査、つまり「…学」とつくもの全てにまたがって行っていると答えた。

ラクダ工達はとうとう我々を凝視し続ける事に飽き、我々が決して動かない事を悟ると50m先に移動してしまった。研究者は各自緑とオレンジの縞模様のテントを建てた。ジョンは上級士官は大した事無いと言った。

「あのテントを建てるのに15分も費したぜ。」

一方我々英国軍とは言えば土ぼこりの中にしゃがみ込み、顔はうす汚れてボロボロに日焼けしているし、着ている物はシャツ（私のユニオン・フラッグのプリントが薄れかけていた）とブーツとほんのちょっとした物だけで、勿論お互いがテントで隔てられてなんかいなかった。

ジン・ジュンが作ってくれた夕食は信じられない代物だった。新鮮な野菜と、彼が早朝にし射めた野兎をチョウメン風に仕上げたもの、巻きパンに揚げパンだった。我々はもりもり食べた。美味しかった。

翌日出発する時は気分が重く、皆が皆口数が少なかった。徒渉の後、1時間程で他のメンバーに合流するはずだった。どこまで彼らが登っているのかを見当付ける事に躍起になった。私自身、早く彼らと合流し、チームの一員に戻りたかった。

我々は、先発隊が重い荷を持たずに歩き、徒渉

はラクダに乗ってやったのだろうと思った。自分達の事が少し誇らしく思えた。彼らは氷河の末端までラクダを使って楽に移動しているのだろうが、我々は未知の領域を探検しながらかなりの距離を歩いてきたのだ。しかしその自己満足も長くは続かなかった。サルポ・ラッコ川の危険な徒渉が我々一行の調和状態を緊張状態に代えてしまったのだ。危険性を完全に理解してはいなかったが、登山よりは危険でなかったとしても、その時は危険に思えた。ジョン・ディはできるだけ早く山にたどり付く事をはっきり決めていた。安全の為に1日遅らせる事さえ許さない勢いだった。

初めの徒渉の時、彼はこう言っていた。

「もし君がそこから離れて歩くのなら、私の記録には、君は正しい方法を取ったと記しておく。」

その川から歩き出した時、私は徒渉がうまくいった事を稀なる幸運のように思っていた。多分ジョンは、徒渉できたので自分の考えはやはり正しかったと、そして私の反対論はやはり間違っていたのだと思っただろう。

彼が彼自身の事をどう考えているのか知らないが、私は私自身の事をちっぽけでひ弱でつまらなく思っていた。彼がこの信じられない程強力で恐ろしい状況の中をものがきながら通り抜けた時、憶病な小動物である私は本心を気付かれまいと願っていた。

#### ■ベース・キャンプにて

サルポ・ラッコ川の困難な徒渉が終わった。ジョンはザイルを回収し、我々は靴下を絞って暖かい服をはおり昼食を取った。強い強風がぶ厚い砂ぼこりを我々の顔やランチョン・ミートの上に吹き付けた。体の震えはなかなか治まらなかった。BCまで残すところわずか2kmだった。さらに近づいた時小山のふもとにオレンジのテント1張と青のテント2張が見えた。キャンプ・サイトは荒涼としていた。

ヘンリーからの長い伝言が一番大きなテントの床に止めてあった。そこには我々への指示が書いてあった。彼の予想より2日早く到着したので、その指示を練り直す必要があった。私は小1時間程ザックの上に横たわってぼんやり過ごした。それから、他のメンバーが竹棒の上に設置しておい

たソーラ・シャワーを点検した。

キャンプ地には大隊のいた痕跡が残っていた。2ヶ月間に渡って滞在していた日本隊が至る所に複雑な文字の書かれた残物を残していた。他のメンバーが可能な限り、それらを片付けた跡もうかがえた。大きな岩がトイレ用に設置され、もう1つ離れた所にある岩にはシャベルとトイレトーパーがあった。ジュリー缶を冷やす水場や、テントから離れた所に燃料デポ地（調理用のガソリン）もあった。

K2のBCでニックと私は、ジン・ジュンお手製の湯沸かし用オープンに感心したが、ここで同じものを作ろうという事になった。穴を掘って石で被い、大きなポットをその中に置いた。さらに泥を混ぜて、火元になる穴にポットがきっちり納まるようにし、古い缶を使って煙突まで付けた。ニックは十分に乾燥した石を積み重ねて炉と調理場を作った。万事うまく仕上がり、私達二人は気分良くそこに座って、ラクダ工達のようにたっぷりの紅茶が煮える匂いを嗅いだ。日が暮れないうちに手仕事を完了できた事を自我自賛した。

翌朝は8時まで寝袋の中にいた。火を起こして朝食用の湯を沸かす為にニックと私は火の起こり加減を調べた。マークII変型形がオープンの上うまく作られた。フライパン調理用の部分も湯沸かし器も満足のいく動きぶりだった。

洗濯の後、ラクダ荷おろし場まで散歩に出かけた。(BCから氷河の方へ歩いて30分) ジョンは、この場所までもっと多くの装備を荷上げるべきだった、荷おろし場としての機能を為していないと言った。

我々は装備を集めた。私を喜ばせる発見があった。カメラ器材とフィルム(強くあらい麻布)がくぼ地の中にデポされ、さらに石とヘジアンバッグで日よけされていたのだ。ヘンリーの指示によれば、個人の山道具全ての、ABCへの荷上げは1回だけで済ませるようにとのことだった。多分70ポンド以上の重さになるだろう。

ラドと私はぶらぶらと引き返ししながら、今後生じるであろうリスクと、この隊がカラコルムでの経験に欠けている事について論じ合った。リスクを正しく算出できる為の十分な専門意見がこの隊

の中にあるのかどうか疑問だった。私は天気の変化にも気づかず、ラドから借りていたWilbur Smithを“調理場”のそばで読み終えた。

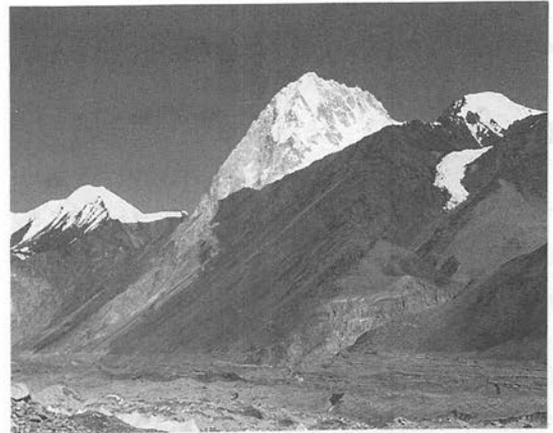
ヘンリーは2つめのメモ書きを大きな厚紙シートに残していた。ジョンはそれをよく吟味した。ヘンリーの最初のメモに書いてあった行動予定を我々はいささか小馬鹿にしていた。それはABCへの装備荷上げに2日費す事になっており、1日目にはラクダの荷下ろし場まで、2日目はABCまでという計画だった。先行メンバーはラクダの後ろに付いて歩いてたという考えを持った、あの横柄さと同様の気分で、我々なら1日で片付けられるだろうと思った。しかし、もっとよく読んでみると、ラクダの荷下ろし場は2つあるらしい事に気付いた。ひとつは今日行った所で、他に氷河の頭近くのABC寄りにもあるらしかった。最初に考えたよりもかなりハードな予定になりそうだった。

ヘンリーの立てた行動計画は非常に練られたものだった。ABC以上で活動するメンバーにとっては、各テントでの宿泊予定はデリケートなものであった。予定表に厳密に沿って行動する事は極めて重大で、それはテントの寝場所を確保する為のみならず、食料や燃料の適切な配給を保つ為でもあった。

その日は風が強く寒かった。クラウン峰は依然ガスに隠れて見えない。我々全員まだ目に見えない。先行パーティがどこまで進んでいるのか全く見当がつかなかった。時間は矢継早やに過ぎていった。その日は9月9日だったが、頂上を目指すタイム・リミットは9月末だった。イギリスを発つ前、ヘンリーは登山活動は2週間と言っていた。ABCへの荷上げをすませると残るは2週間だけとなる。

ジョンとニックは今や確固たるペアとなっていた。ニックはジョンの登山知識を評価していたし、ジョンはそんなニックが気に入り、またニックの体力を買っていた。二人は一刻も早く登山活動を始めたがっていた。

じっと座っている事にうんざりしてはいたが、ラドと私はヘンリーの指示を守り、ネリーとジェリーが我々をABC付近の荷下ろし場まで案内し



▲ABCから望むクラウン（1992）

に下ってくるのを待つべきと考えていた。

また我々二人はジョンほどには焦ってもいなかった。サルポ・ラッコ川の徒渉は無鉄砲で不合理な行為だったが、案内が下るまで待てとの指示を無視して未知の広大な氷河をやむくもに進むのも、同様に無謀な行為のように思えた。

そんなわけで何の議論も異論も無いまま、コンラッドと私はBCに待機し、ジョンとニックはABCを自力で目指す事になった。翌日、重い荷を背に二人はBCを後にし、ラドと私はBCでの穏やかな1日を過ごした。荷下ろし場から本を回収し、“Lord of the Rings”の続きを読んだ。ランチオン・ミートやガーリックを揚げたものやビスケットで昼食を済ませた後は午睡を取り、6時から夕食の仕度にとりかかった。ストーヴから流れ出る煙の中でかがみこんでいた時、向うの角から日焼けしたやせ気味の二人がひょっこり現れた——氷河を案内してくれる為に下りてきたジェリーとロボだった。我々は大喜びした。

二人はジョンとニックの踏み跡を氷河上に見付けたが、違う方向に進んでいたと言った。私は沢山の食料をポットに入れた。ガーリックとギーを使ったカレー、乾燥肉（羊・牛）、やや新鮮なりんご4個（日本隊が残っていたもの）、牛の尾や野菜スープ。パン種は豆と牛の尾スープに混ぜた。私は米の炊き方も知っていた。煮るといよりはむらす位の水加減で最後の十分はプラスチックのふたで鍋を密閉。2つの包い袋が米を十分ふくらと炊き上げてくれた——食べ切れない程の量だ。

ジョンとニックはNo.2の無線機を持っていった。午後8時、夜の定時交信の時彼ら呼び出そうとしたがだめだった。

### ■日本隊のこと

ジェリーとロボは日本隊に会った時の事を話してくれた。ジェリーと一緒にヘンリーがラクダと連絡官を追いぬいて一番先に日本隊のメンバーに声をかけた。ヘンリーの関心事は2つあった。ひとつは彼らが登頂したかどうか。もうひとつは南側のルートに可能性があるかどうか。もし彼らがそのルートから登ったか或いはルートに可能性が無いようだったら、日本隊に口裏を合わせてもらって、L.O.に南側ルートは不可能で北側に変更した方がよいと説明してもらおうと思った。

二人は久しく会っていなかった12支族と交流しようとしている宣教師のように、傘を差しながら大まかに進んでいった。日本隊は登頂できなかった事に大分意気消沈しており、翌日発つ時には涙を浮かべるほどだった。彼らは登山活動を始める前にも1ヶ月費していた。ABCへの荷上げには3日を要していた。ルート上の至る所に珍しい東

洋の食料をデポしたまま残していたので、それを使用させてもらう事ができた。ロボとジェリーによれば、日本隊はスポーツマン精神に溢れ気前のいい人々だった。利用価値のある写真や道具を分けてくれただけでなく、各ルートやクラウン峰そのものについて知っている限りの情報を提供してくれた。

生活全体の新しいパターンが山の中で展開した。——一刻も早くそれに染じまなければならない。荷物を背負っての登り下りの繰り返し、来たる何日かのスケジュールは各ペアの手で渡され、毎日完璧なレーション・ボックスのメニューを使用した。今や我々は大隊の一員だった。人跡未踏の地の真中でさまよい歩く、小さな孤立隊ではなかった。我々四人は2つのグループに分裂した。ひとつは早く登山活動を始めたいというジョン達一氷河の中で行方知れずになっている一、そしてラドと私。他のメンバーと合流する事を待ちこがれ、そして登山への純粋な気持ちから、一体自分達は何の為にこうしているのか思い悩む私達だ。

(訳：菅原愛里)

# 山の情報誌「岳人」



毎月15日発売 (日・控日の場合は前日) 定価700円

### ■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。

お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

99年	特集
★ 1月号	雪の槍ヶ岳・穂高連峰・笠ヶ岳を登る
2月号	再発見・八ヶ岳 森の逍遥から氷瀑まで
★ 3月号	魅惑の雪稜、滑降三昧の後立山連峰
4月号	残雪の上越国境、奥利根源流を訪ねて
★ 5月号	新緑の頸城・戸隠 北の山、南の山
6月号	南アルプス、鋸岳から光岳、深南部へ
★ 7月号	花、尾根、沢の東北の盟主・朝日と飯豊
8月号	幽遠の黒部溪谷、岩壁、源流、高原へ
9月号	森と尾根と谷、紀伊半島の大峰・台高
★10月号	南会津と奥美濃、山里の魅力も探る
11月号	秋深い奥秩父と西上州 その山と人
12月号	岩と雪の殿堂・剣岳と立山連峰へ

(★は特大号・800円となります)

東京新聞出版局 (中日新聞) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL 03-3740-2674  
 (東京本社) 全国の書店で発売中/中日新聞販売店でも取りつぎます

# 新疆ウイグル自治区登山の和文参考資料

(1979年開放以後のもの)

- 1) チョゴリ (Qogir) 8,611 m
  - 1. 喬戈里 登頂記 (中国側北稜ルート征服の全記録) 日本山岳協会/NHK取材班 日本放送出版協会 昭和57年12月20日 1,600円
  - 2. 挑戦の記録・チョゴリへの道 (世界第二峰に中国側から無酸素で初登頂) 朝日新聞社 昭和57年12月20日 1,500円
  - 3. チョギル峰・カラコルム主峰 (尚子平) 「月刊 人民中国」1983年3月号
  - 4. 喬戈里峯 (K2) 偵察行 (原田達也) 「山岳第77年」日本山岳会 1982年12月1日 2,500円
  - 5. 喬戈里峯 (K2 北面・地図の空白部を探る) 原田達也 「岳人415号」1982年1月号
  - 6. K2 北稜偵察記 (坂下直枝) 「岩と雪86号」
  - 7. 遥かなる喬戈里の頂に 「日本山岳協会喬戈里峯 (K2) 偵察隊」(小西政継) 「山と溪谷536号」1982年1月号
  - 8. 喬戈里峯 (K2) 登山の展望 (小西政継登攀隊長らに聞く) 編集部 「岳人415号」1982年1月号
  - 9. 悔いなき登山の展開を (喬戈里峯の未踏の北稜登攀をめざして) 新貝勲 「岳人418号」1982年4月号
  - 10. 山は晴天 (小西政継) 中央公論社 昭和57年4月10日 1,300円
  - 11. 登頂手記: 「チョゴリへの長い道」(吉野寛) 「山と溪谷550号」1982年11月号
  - 12. チョゴリ (K2) 北稜無酸素初登攀成る (川村晴一) 「山と溪谷550号」1982年11月号
  - 13. チョゴリ峰登山の光と影 (登頂隊員に聞く) 編集部 「岳人425号」1982年11月号
  - 14. チョゴリ峰遠征をめぐる (水野勉) 「ヒマラヤ132号」1982年11月号
  - 15. タクラマカンの彼方・チョゴリへの旅 (佐々木慶正) 「ヒマラヤ131号」1982年10月号
  - 16. 砂漠と氷雪の彼方に (チョゴリ登頂の全記録) 小西政継 山と溪谷社 1983年9月1日 1,200円
  - 17. 果てしなき山行 (尾崎隆) 中央公論社 昭和58年7月20日 1,200円
  - 18. 喬戈里峯北稜 (高見和成) 「山岳第78年」日本山岳会 1983年12月1日
  - 19. 日山協、とんだ遭難さわぎ (佐瀬稔) 「岳人446号」1984年8月号
  - 20. 日山協チョゴリ峰登山隊の不祥事を越えて (小西政継) 「山と溪谷579号」1984年10月号
  - 21. 食い物にされた登山隊 (編集部) 「岩と雪104号」
  - 22. 稜線・追悼吉野寛 (吉野あつ子) 1985年10月
  - 23. 天の匂い・柳沢幸弘遺稿集 (登攀クラブ蒼氷/早大岳友会) 1984年8月
  - 37. 喬戈里峰 (K2) 登頂 (今村裕隆) 「ヒマラヤ229号」1990年12月号
  - 38. 喬戈峰北西面の登攀 (岸本五三男) 「山岳第86年」日本山岳会 1991年12月7日
  - 39. チョゴリ峰登頂 (横浜市日中友好喬戈里峰登山隊) 「岳人522号」1990年12月号
  - 40. 聖域の巨峰—喬戈里峰北西壁初登攀の記録— 横浜市日中友好喬戈里峰登山隊実行委員会 平成3年8月1日
- 2) シャクスガム河上流域
  - 1. 最後の地図の空白部 (福島正明) 「山と溪谷650号」1989年9月号
  - 2. G1 東稜に新ルート (横浜山岳協会ガッシャーブルムI峰登山隊) 「岳人507号」1989年9月号
  - 3. シャクスガムの遥かなる峰 (宮城県山岳連盟) 1990年1月20日
  - 4. BROAD PEAK 未踏の稜から中央峰登頂 (オスカル・カディアチ) 「岩と雪161号」1993年12月
  - 5. シャクスガム溪谷に輝く峰々 中国側からのガッシャーブルムII峰偵察 (奥原幸) 「岳人616号」1998年10月号

- 3) クラウン (The Crown) 7,295m
  1. 未踏の山・辺境の山 第4回: クラウン (カラコルム) 藤大路美興「岳人407号」1981年5月号
  2. 皇冠峰の頂をめざして「ヒマラヤ164号」1985年7月号
  3. 砂漠の果ての遙かな頂「ヒマラヤ171号」1986年2月号
  4. クラウン (館野秀夫)「岳人463号」1986年1月号
  5. 砂漠の涯の遠き頂き (日本ヒマラヤ協会) 1987年3月
  6. 中国・皇冠峰登山を顧みて (山本良三)「山岳第83年」日本山岳会 1988年12月
  7. 世界第3位の未踏峰堕ちず (岡本良治)「山と溪谷630号」1988年1月号
  8. 皇冠峰の頂目指して「ヒマラヤ225号」1990年8月号
  9. クラウン峰隊事故報告「ヒマラヤ229号」1990年12月号
  10. 皇冠峰の堅墨なお高く「ヒマラヤ230号」1991年1月号
  11. クラウン峰BC踏査報告 (山形正己)「ヒマラヤ241号」1991年12月号
  12. 三度シャクスガムを越えて—皇冠峰登山計画—「ヒマラヤ248号」1992年7月号
  13. クラウン峰事故報告「ヒマラヤ254号」1993年1月号
  14. 皇冠の頂なお遠く「ヒマラヤ255号」1993年2月号
  15. 永別 皇冠峰 1992年クラウン峰挑戦の記念 日本ヒマラヤ協会 1994年5月
  16. 世界第2の未踏峰クラウンに全員登頂 (日中友好皇冠峰登山隊「岳人557号」1993年11月号
  17. 皇冠の冠に立つ クラウン峰初登頂の記録 (徳島和男)「山岳第八十九年」1994年12月3日
  18. The Crown 日本山岳会東海支部 1994年3月
  19. 麒麟峰 花園にそびえる7,000mの未踏峰に全員登頂 (岐阜大学)「岳人569号」1994年11月号
  20. 麒麟峰初登頂 岐阜大学 1995年7月
- 4) コングール (Kongur) 7,719m & コングール・チュビエ (Kongur Tiubie) 7,595m 他
  1. 日本コングール登山隊1980 (先遣隊報告書) 京都カラコルムクラブ
  2. コングール峰・巨大な屏風 (劉大義)「月刊人民中国」1982年12月号
  3. 登山・それは愛 (塚本圭一) 東京新聞出版局 1981年4月15日 1,200円
  4. ザイルの二人 (満則・秋子の青春登攀記) 山と溪谷社 1983年1月10日 980円
  5. コングール7,719mの光と影 (池田常道)「岩と雪85号」
  6. コングール峰北稜での“死” (寺西洋治・鴨満則・松見新衛) 塚本圭一「岳人413号」1981年11月号
  7. コングール峰初登頂 ('81・7 アルパインスタイルによる英国隊の成果) 編集部「岳人412号」1981年10月号
  8. コングール私記 (アラン・ラウス)「岩と雪89号」
  9. コングール・チュビエ峰登頂 (木村清順)「山岳第77年」日本山岳会 1982年12月1日
  10. コングール・チュビエ峰・キルギスの白い帽子 (袁揚)「月刊 人民中国」1983年2月号
  11. コングール主峰北稜を全員で初登攀 (京都カラコルムクラブ日本コングール登山隊)「岳人508号」1989年10月号
  12. コングール —1980・1981・1989 (日本コングール登山隊「山岳第84年」1989年
  13. 中国西域コングール・チュビエ峰 —1989年登山隊報告書 (宮崎県山岳連盟中国西域登山隊) 1990年5月
  14. 幸運な転進、初登頂のチャクラギール (明学山岳会中国・チャクラギール登山隊)「山と溪谷642号」1989年1月号
  15. かがやく峰 Kongur 1989年日本コングール登山隊報告書 京都カラコルムクラブ 1994年5月
- 5) ムスターグ・アタ (Muutagata) 7,546m
  1. シルクロードの白き神へ スピダーニエ同人
  2. シルクロードの白き神へ (ムスターグ・アタの登頂 81・8) 崑崙登攀川崎市教育隊「岳人413号」1981年11月号
  3. ムスターグ・アタ北峰 (坂原忠清)「山岳第77年」日本山岳会 1982年12月1日

4. ムスターグ・アタ峰：氷山の父（陳栄昌）  
「月刊 人民中国」1982年9月号
  5. アメリカ隊と挑んだ7,000m峰山スキー遠征記（笹山博夫）「山と溪谷601号」1986年2月号
  6. 中国北部「氷山の父」ムスターグ・アタ登頂と頂上からのスキー滑降（牧野総治郎）「山と溪谷625号」1987年8月号
  7. 微笑んだ中央アジアの双頭の峰ムスターグ・アタ（尾崎啓一）「山と溪谷628号」1987年11月
  8. ムスターグ・アタ医学学術登山隊「ヒマラヤ学誌第1号」京都大学ヒマラヤ研究会 1990年3月10日 1,500円
  9. 絲綢之路の白き峰 -ムスターグ・アタ- 鶴岡ヒマラヤ研究会 1991年12月1日
  10. ムスターグ・アタ登山（相馬勉）「山558号」1991.11.20
  11. 北へ北へ頂へ -夢馳せた追憶の日々-（三原洋子）「ヒマラヤ225号」90年8月号
  12. 第二次海外登山 日本山岳会慕士塔格山登山隊'91報告書（同）1992年7月
  13. 慕士塔格山（ムスターグ・アタ）登山の記録（相原勉）「山岳第87年」日本山岳会 1992年12月5日
  14. 氷山の父に挑む（H A J ムスターグ・アタ登山隊1992年）「ヒマラヤ257号」1992年4月号
  15. ムスターグ・アタ登山計画「ヒマラヤ260号」1993年7月号
  16. ムスターグ・アタ全員登頂「ヒマラヤ266号」1994年1月号
  17. ムスターグ・アタ登山計画「ヒマラヤ273号」1994年8月号
  18. ムスターグ・アタ全員登頂「ヒマラヤ278号」1995年1月号
  19. 葱峰の白き父なる山 日本ヒマラヤ協会 1995年4月
  20. ムスターグ・アタ登山計画「ヒマラヤ297号」1996年8月号
  21. ムスターグ・アタ登頂「ヒマラヤ301号」1996年12月号
  22. パミールの名峰 氷山の父に登る「ヒマラヤ313号」1997年12月号
  23. 新疆の太陽と風と山 ムスターグ・アタ峰学術登山仮報告書 芝浦工業大学 平成9年10月
  24. 新疆の太陽と風と山 芝浦工業大学山岳部・OB会 1998年3月
  25. シルクロードの白い峰 スキーDEサミット隊1997 1998年3月
  26. ムスターグ・アタ登山仮報告書 栃木県山岳連盟 遥かなるムスターグ・アタ 栃木県山岳連盟 1999年4月
  27. ムスターグ・アタ山群の未踏峰全員登頂に成功（青年部・学生部）「山606号」1995年11月号
  28. ムスターグ・アタ山群未踏峰の登頂（絹川祥史）「山岳第九十一年」日本山岳会 1996年12月7日 ムスターグ・アタ峰登頂から（堀田晁彦）「山641号」1998年10月号 Kobold コクセル峰初登頂特集 山形大学コーボルト会 1993年
- 6) 崑崙周辺
    1. ウルグ・ムズターグの謎と正体（水野勉）「岳人444号」1984年6月号
    2. 西城秘話（上・下）測量士ジョーンソンの生涯「ヒマラヤの三角測量」（金子民雄）「岳人444 & 445号」1984年6 & 7月号
    3. 万山の祖、崑崙の頂へ「ヒマラヤ165号」1985年8月号
    4. 遥かなる崑崙の頂「ヒマラヤ169号」1985年12月号
    5. 崑崙に咲いた日中友好の花（日中婦人友好登山隊）「岳人461号」1985年11月号
    6. 開かれた万山の祖「崑崙山脈」（森美枝子／釣部恵子）「山と溪谷598号」1985年12月号
    7. 地球の背骨の一角に立つ（日本ヒマラヤ協会 日中婦人友好登山隊）1986年5月
    8. ウルグ・ムズターグ初登頂 -1985年秋-（周正、尾形好雄：訳）「ヒマラヤ177号」1986年8月号
    9. 幻の中央アジアの最高峰（早坂敬二郎）「山と溪谷615号」1986年12月号
    10. 東京農大崑崙7,167メートル峰（早坂敬二郎）「山岳第82年」日本山岳会 1987年12月
    11. 崑崙山脈7,167m峰登山隊86（東京農業大学山岳部）1988年1月
    12. 秘境・崑崙に行く（大場秀章）岩波書店 19

89年6月20日 490円

13. 崑崙山脈の範囲は、どこからどこまでか (譚佐強)「ヒマラヤ180号」1986年11月号
  14. 崑崙の秘境探検記 (周正/田村達弥訳) 中央公論社 1986年11月号 500円
  15. 中国崑崙山脈 無名峰6,699mの探査・5,740m峰の初登頂 (諸岡久四郎) 福岡山の会 1989年11月
  16. 慕士山 (ムズターグ) 初登頂 (栃木県高体連登山部中国崑崙登山隊) 1990年9月
  17. 慕士山 (ムズターグ峰) 初登頂 (同上) 「岳人523号」1991年1月号
  18. CHQLPANLIK MUZTAGH 6524 崑崙登山隊報告書 (仙台-高山の会崑崙登山隊) 1990年7月
  19. ギンリク・ターク初登頂 山形県山岳連盟
  20. ハーン・ヤイリク峰偵察1995報告書 板橋勤労者山岳会 1995年11月
  21. 砂塵の彼方へ 崑崙山脈 ハーン・ヤイリク峰 6,744m 初登頂の記録 JWAF崑崙登山隊 1997年5月
  22. 町の山岳会の崑崙登山 夢を現実にさせる努力を (江口充章) 岳人607号 1998年1月号
  23. 崑崙山脈7,167m峰登山隊報告書 西陣山岳会 1998年3月
  24. GPSでたどるタクラマカン砂漠と崑崙の旅 (西山邦夫)「岳602号」1997年8月号
  25. ヘディンがたどった崑崙の道 (松本徂夫) 「岳人573号」1995年3月号
- 7) トムール (Tomur) 7,435m 周辺
1. トムール峰は遠かった (トムール峰日本女子登山隊)「岳人473号」1986年11月号
  2. 九死に一生を得た10人の女たち (田部井淳子) 「岳人473号」1986年11月号
  3. 天山山脈 托木尔峰 (女子登攀クラブ) 1986年12月
  4. 再び天山の雪蓮を目指して (日中友好天山山脈雪蓮峰登山隊)「ヒマラヤ205号」1988年12月
  5. 砂嵐の山旅 (天山山脈雪蓮峰登山隊)「岳人477号」1987年3月号
  6. 執念の初登頂-天山山脈雪蓮南峰- (89日中友好天山シルクロード学術調査登山隊)「岳

人509号」1989年11月号

7. EXPEDITION III (横浜市立大学探検部) 1990年11月
  8. 天山の秘峰 雪蓮峰陥落 (徳島和男) 「ヒマラヤ229号」1990年12月号
  9. 未踏の天山・雪蓮に立つ (徳島和男) 「山岳第86年」1991年12月 3,500円
  10. 雪蓮峰初登頂 (日中友好天山山脈雪蓮峰登山隊)「岳人522号」1990年12月号
  11. 雪蓮峰 日中友好天山山脈雪蓮峰登山隊 1988年 日本山岳会東海支部 1989年3月
  12. 雪蓮峰 6,627m 日中友好天山山脈 雪蓮峰登山隊1990 日本山岳会東海支部 1991年3月
  13. '90・天山山脈トムール峰登山隊報告書 (横浜市立大学天山踏査の会) 1991年5月
  14. '92・天山山脈トムール峰登山隊報告書 天山登攀倶楽部 1993年3月
  15. '94・天山山脈トムール峰登山隊報告書 天山登攀倶楽部 1996年5月
  16. はるかなる「雪の眉」をめざして 天山山脈カシカール峰初登頂 (守尾益男) 登山時報No. 248~251号 1995年10月号~96年1月号
  17. 天山山脈 科其喀尔峰初登頂の記 J.W.A.F 瀬戸内天山カシカール峰登山隊
  18. 乾いた山と中国の朋友 宮武よし子 1996年7月
  19. グルグルムスターグ初登頂 (大石惇)「山岳第93年」1998年12月5日 3,500円
  20. 新疆巴音布魯克草原と中部天山山麓の旅 (川上隆)「山631号」1997年12月号
- 8) ボゴダ (Bogoda) 5,445m
1. 中国・天山山脈処女峰 ボゴダ 京都山岳会 1981年12月1日
  2. 天山山脈 博格達峰 (国鉄岳連中国親善登山報告) 国鉄山岳連盟 昭和57年4月20日
  3. 日本山岳会学生部ボゴダ峰登山隊1981年の報告 日本山岳会学生部ボゴダ登山隊
  4. 天山の詩 (ボゴダIII峰初登頂報告書) 天山会登山隊・トレッキング隊
  5. 天山への夢遥か (中国遠征特集号) もんたにゅう会
  6. 日本山岳会学生部ボゴダ山登山隊1982年の報

- 告 日本山岳会学生部ボゴダ登山隊
- 7.ボゴダ峰・天池を抱く山(王振華)「月刊人民中国」1982年8月号
  - 8.ボゴダ山群1981年(鹿野勝彦)「山岳第77年」日本山岳会 1982年12月1日 3,500円
  - 9.天山山脈ボゴダ峰(5,445m)周辺の自然について(2,3のメモ)名越昭男「山岳第77年」
  - 10.地名と地図と標高について(折込地図解説)児玉茂「山岳第77年」
  - 11.ボゴダ山群の鳥(その鳥相についての案内)児玉茂「山岳第77年」
  - 12.ボゴダ主峰初登頂(1981年5~6月の記録)京都山岳会ボゴダ登山隊「岳人411号」1981年9月号
  - 13.京都山岳会ボゴダ峰登山隊の記録(梶原達男)
  - 14.ボゴダⅢ峰の初登頂(81・8日本天山会登山隊による全員登頂)編集部「岳人412号」1981年10月号
  - 15.ゴボダ山群ひとめぐり・JAC学生部登山隊(増島達夫)「山と溪谷538号」1982年3月号
  - 16.高校生の海外遠征(座談会:ボゴダ峰とツイズ峰登山)「岳人425号」1982年11月号
  - 17.熱意あふれる技術研修(ボゴダ山麓の日中登山研修に参加して)中村正勝「岳人426号」1982年12月号
  - 18.ボゴダをめざして 動霧山岳会 昭和58年5月1日
  - 19.登山と自然観察(川澄隆明)「岳人433&434号」1983年7&8月号
  - 20.ボゴダ山群の植生について(奥田尚志)「山岳第78年」日本山岳会 1983年12月1日 3,500円
  - 21.ボゴダⅡ峰の南面の地学的知見(川澄隆明)「山岳第78年」
  - 22.ボゴダ西峰と中央峰を踏破(JAC学生部)「岳人452号」1985年2月号
  - 23.天馬の里(鈴木/大野紀和)「岳人452号」
  - 24.天山博格達Ⅵ峰登山報告書(仙台-高山の会天山登山隊)1985年1月
  - 25.天山への路(福島天山友好登山訪中団)1985年11月
  - 26.日本山岳会学生部ボゴダ峰登山隊1984年
  - (大野紀和)「山岳第80年」日本山岳会 1985年12月 3,500円
  - 27.'86博格達登山報告書(福島教育大学山岳会)1987年3月
  - 28.ゴボダ峰(5,445m)登山報告書 栃木県山岳連盟 1995年12月
  - (その他)
  - 1.中国・新疆北部の旅 ハラス氷河は遠かった(奈良原町子)「山630号」1997年11月号
  - 2.アルタイ登山計画「ヒマラヤ333号」1999年8月号
  - 3.絲綢之路の未踏峰(川上隆)「山627号」1997年8月号
  - 4.新疆・ウイグルの印象(チョゴリ峰登山隊顧問団訪中に参加して)広島三朗「岳人422号」1982年8月号
  - 5.夢街道「天山南路」東西文明の交路、烏魯木齊から喀什まで(田島正)「山と溪谷564号」1985年9月号
  - 6.ウルムチからクンジェラープ峠を越えてフンザへ(佐俣敏郎)「山と溪谷617号」1987.1
  - 7.天山越えの古代シルクロード氷河古未道とムザルト峠(奥野三郎)「山と溪谷619号」1987年3月号
  - 8.シルクロードの幻の山(金子民雄)「岳人483~484号」1987年9~10月号
  - 9.天山北路シルクロードの旅(尾形好雄)「ヒマラヤ205~207,209号」1988年12月~
  - 10.玄奘の天山を行く(小川務)「岳人510~512」1989年12月~
  - 11.青春アドベンチャー行~篠崎純一さん、7ヶ月でアジアの12座をいっきに登頂(雪蓮峰~ムスターグ・アタ等)「岳人512号:1990年2月号」
  - 12.タクラマカン砂漠横断記(黄文季著・渡辺義一郎訳)「岳人第86年」日本山岳会 91/12
  - 13.中国の氷河と気象の特性(天山での中、日合同調査に参加して)上田豊「岳人415号」1982年1月号
  - 14.新しき土地の古道を往く1~2(岩崎洋)「ヒマラヤ283号~284号」1995年6月号~7月号

## ■ 寸 感 ■

氷河の衰退、(やせ細り?)のおかげで以前は問題のなかった場所が登山不可能になってしまっていたり、一部の山では以前には登山者のいなかったシーズンに登山隊が入るようになりました。辺境地の生活環境の改善、人口の増加により、10年前に感激したお花畑が、跡形もなくヤクの放牧により消失していたと、あるテレビ番組が伝えていました。

ヒマラヤ地域の自然も、人も、社会も大きく変わって行こうとしています。やはり、現地に行ってもその変化を身体で感じなくては行けないと、痛切に思うこの頃です。もしかしたら新しいルートが開けるかも。

今回と次号、わずかながら編集のお手伝いします。協力をお願いいたします。(中川)

## 事務局日誌 (9月)

4日(土) 群馬岳連シシャパンマ、冬期マナスル登山隊壮行会 (於前橋:山森、尾

形、中川)

9日(木) 「ネパール登山の手引第二版」  
「神々の座・8000m峰のデータ」  
搬入  
10日(金) チベット連続登山隊出発  
22日(水) 「田部井淳子さんの還暦を祝う会」  
(於ムマン・タイ。なべ:尾形、八木原)  
27日(月) 東京集会 (16名)

## ヒマラヤ No.336 (11月号)

平成11年10月10日印刷 11年11月1日発行

発行人 山森欣一

編集人 山森欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



## ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター  
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店: 日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先: 株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

# TREASURE TOUR



## EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、  
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



**マウンテントラベル株式会社**  
〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

**☎03-3574-8880**

三井航空サービス代理店2452号

# 遙かなる高みへ



**Royal Nepal Airlines**

The way to Nepal ロイヤル・ネパール航空旅客代理店



SINCE 10th Dec. 1973

**株式会社 西遊旅行**

25 years with  
exciting countries

**SAIYU TRAVEL CO., LTD.**

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします  
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～

トレッキング・海外登山・シルクロード・  
秘境旅行のバイオニア



**株式会社 西遊旅行**

運輸大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■本社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1  
岩波書店アネックス5階  
☎03(3237)1391(代) FAX03(3237)1396  
■大阪営業所 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5階  
☎06(6367)1391(代) FAX06(6367)1966  
■カトマンズ連絡事務所 (JAI HIMAL TREKKING/SAIYU TRAVEL)  
P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL  
☎221707, 224248

●格安航空券はこちらに!



**キャラバンデスク**

キャラバンデスク東京(住所:本社内) ☎03(3237)8384(代) FAX03(3237)0638  
キャラバンデスク大阪(住所:大阪営業所内) ☎06(6362)6060(代) FAX06(6367)1966

◆パンフレット請求や個人旅行のお申し込みは  
**フリーダイヤル**をご利用下さい  
(通話料無料)

**☎0120-811395**

西遊旅行ホームページ (<http://www.gol.com/saiyu/>)

# ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



## Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店 / 〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店 / 〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店 / 〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店 / 〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店 / 〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店 / 〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店 / 〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店 / 〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店 / 〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店 / 〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店 / 〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブラーカ店 / 〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブラーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店 / 〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店 / 〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店 / 〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店 / 〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店 / 〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店 / 〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店 / 〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー) / 〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



### ICI 石井スポーツ

事務所 / 〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004